

意味領域から考える日本語の テンス・アスペクト体系の記述

—— 「母語の知識を活かした日本語教育」のために ——

庵 功 雄

1. はじめに

日本語教育文法の実践形の1つに「産出のための文法」がある（庵 2015a, 2016a, 2017）。産出のための文法記述にとっての留意点として記述の簡潔さが挙げられるが、もう1つ重要なのは、「母語の知識を活かす」ということであり、後者のためには、対照研究にもとづいた体系的な記述が必要となる。

本稿では、以上の問題意識に基づき、日本語のテンス・アスペクト体系を日本語教育文法の立場から記述したものを提示し、それと英語を対照したものを提案する。この対照が基本的に妥当であれば、ヨーロッパ言語（および、それと類似した体系）との対照に関しては、基本的に英語との違いに留意して調整すればよいことになる。さらに、この体系を指定することによって、テンスが文法カテゴリーではないという点で英語と異なる中国語との対照に関しても一定の示唆が得られるのではないかと考えられる。そして、この対照が基本的に妥当であれば、テンスに関して中国語と同様の特徴を持つと考えられる他の東南アジアの言語との対照の枠組みとしても一定の妥当性が得られると考えられる。

本稿の提案は日本語を出発点とするものであるが、それを、テンスが文法カテゴリーである英語、テンスが文法カテゴリーではない中国語と、枠組みとして比較することにより、日本語教育の文法教育におけるテンス・アスペクトの教育に共通の枠組みを導入することを目指すものである。

2. 母語の知識を活かした日本語教育

日本語教育文法にはいくつかの考え方があるが（小林 2013）、論者は、日本語教育文法にとって最も重要なのは「産出のための文法」であると考えている⁽¹⁾。

一方、成人の第二言語習得において母語転移が占める役割を積極的に認め、負の転移を抑えつつ、正の転移を活かすという教育理念が張（2011）において提案されている⁽²⁾。論者もこの考えに共感し、張（2011）の理念を活かした教育を「母語の知識を活かした日本語教育」ととらえて、その具体的な形について研究を行っている（庵 2015b, 2016b）。

本節では、これらの概念にとって重要な考え方（勘所）についてごく簡単に述べる。

2.1 産出のための文法

まず、「産出のための文法」については、次のようなことが重要である⁽³⁾。

- (1) a. 規則の数をできる限り少なくする
- b. 規則を抽象化しない

これらのことから、「（規則のカバー率）100% を目指さない」ことが重要となる（庵 2011b, 2015a, 2016a, 2017）。

2.2 母語に特化しない日本語教育文法と母語に特化した日本語教育文法

次に、「母語の知識を活かした日本語教育」については、張麟声氏が提案する次の区分が有効であると考えられる。

- (2) a. 母語に特化しない日本語教育文法
- b. 母語に特化した日本語教育文法

張（2017）によれば、庵・高梨・中西・山田（2000, 2001）、グループジャマシイ（1998）などは（2）aに当たり、中国語話者のための日本語教育研究会が目指す研究は（2）bに当たる。上述の論者の研究は基本的に（2）aに当たると言える。

張麟声氏（個人談話）によれば、（2）bは、（2）aをもとに、当該の母語話者にとって理解しにくい点（負の転移が生じやすい点）を修正する形で作られるものとされている。

以上の点からも、「母語の知識を活かした日本語教育」においては、対照研究が

重要な役割を演じることがわかる。

3. 対照研究に必要な観点

本節では、対照研究に関して、論者が重要であるとする研究をごく簡単に紹介する。

3.1 意味から形式へ——Halliday (1994)——

最初に取り上げるのは、Hallidayの主著であるHalliday (1994)である。この中でハリデーは、機能主義 (functionalism) の特徴を、「ある意味がどのように形に写像されるか」という観点からとらえる点に求めている。そして、それは、「ある形がどのように意味に写像されるか」を論じる形式主義 (formalism) との根本的な違いであるとしている (Halliday1994: xiv)。

論者は、このハリデーの機能主義的観点は、対照研究において非常に重要であると考えている。確かに、対照研究は多くの場合、チョムスキーに代表される形式主義的アプローチで行われてきており、多くの成果も得られている。しかし、こうしたアプローチが形式化可能なものだけを比較するというドグマに陥りがちであることも否定できない。「普遍文法 (Universal Grammar)」を求めるような立場からはそうしたあり方も望ましいかもしれないが、少なくとも、言語教育にとって有用な対照研究は、より意味に重点を置いたものであるべきであると考えられる。なぜなら、学習者が第二言語を通して行おうとすることは基本的に、自らが第一言語で表せる意味内容を、第一言語で表すことだと考えられるからである⁽⁴⁾。なお、これは〈やさしい日本語〉においても重要である。なぜなら、定住外国人が日本を「居場所」として感じられるための条件の1つは「母語でなら言えることを日本語でも言える」ことであると考えられるからである (cf. 庵 2016c, 2018 参照)。

ただし、ハリデーの考え方は、意味をベースにするものであるだけに、それが異なる言語間でどのように形式に写像されるのかについては、分析者が自ら考える必要がある (一方、形式主義的アプローチでは、言語間で共通の形式 (構造) が仮定されるので、分析者がこの点について悩む必要はない)。

しかし、実際には、日本におけるハリデーの枠組みによる分析は英語の分析を日本語に横滑りさせただけのものが多く、そのため、その分析は日本語学にほとんど影響 (インパクト) を与えられていない。

論者は、博士論文（庵 2007）において、Halliday & Hasan (1976) におけるハリデーの枠組みが日本語の分析に有用であることを示した（庵（2019 近刊）も参照）が、本稿においても、意味を視野に入れて、日本語のテンス・アスペクト体系を記述する。

3.2 意味領域の設定——宮島（1983）——

上のような意味に基づく対照研究を行う上で参考になるのが、日本語とヨーロッパ語の移動動詞の意味領域の違いを考察した宮島（1983）である。同論文では、移動動詞に用いられる「表現手段」の言語差が論じられている。

例えば、ドイツ語の“hereingeflogen”と日本語の「飛び込んでくる」を比べると、両者はほぼ同様の語構成を持っているものの、ドイツの“her-”と“ein-”はともに副詞的であるのに対し、日本語は全て動詞的な要素から構成されているという違いがある。一方、英語は「入る」に関しては“enter”という1語表現と“go/come in”という組み立て的な表現をともに持っているが、「出る」に関しては“go/come out”という組み立て的な表現しか持っていない。これは、「入る」についてはフランス語の“entrer”を借用したものの、「出る」については“sortir”を借用しなかったことに由来する。

宮島（1983）は、「移動」という現象自体は普遍的である。（中略）しかし、そのありかたは、言語によって、かなりちがう」（宮島 1994：43）という観点から書かれたものだが、これは、上述の「同じ意味が異なる言語間でどのように写像されるか」を考える上で、重要かつ具体的な示唆を与えてくれるものであると言える⁽⁵⁾。

3.3 比べて考えることの意義——井上（2013, 2015）——

対照研究に関する考え方で重要と考えられるのが井上（2013:182）の次の記述である。

- (3) 二つのことばや文化を比べて考えるとは、それぞれの特徴をすりあわせ、「こう考えれば、両者を公平に見ることができる」という落しどころを見出すということである。（傍点原文）

井上（2015）ではこのことが具体的に論じられている。一例として、井上氏は彭（2006）の言う「誘いを断るときに、中国人は行けないということを先に言うのに対し、日本人は理由を先に言う（ので中国人はその意図をはかりかねることがある）」という記述を取り上げて考察を行っている。井上氏の結論は次の通りである。

すなわち、この問題には次の2つのことがらが関与しており、それぞれの言語で優先される内容が異なるだけであり、「物事をはっきり言うか言わないか」という違いの問題が本質なのではないということである⁽⁶⁾。

- (4) ①コミュニケーションにおいて、「相手の発話に合わせて話を続ける」ことがより重視される（中国語）か、「相手が残念に思うことは言わない」ことがより重視される（日本語）か。
- ②「重要な情報を先に述べて話を収束させる」ことを優先する（日本語）か、「相手に質問の余地を与えて話が続くようにする」ことを優先する（中国語）か。

4. 日本語のテンス・アスペクト体系の記述

本節では、以上のことを踏まえて、日本語のテンス・アスペクト体系を記述していく。

4.1 日本語学的記述——工藤（1995）——

まず、現在の日本語学的におけるテンス・アスペクト体系の標準的記述は工藤（1995）による次のものである。

表1 日本語のテンス・アスペクト体系 (1) (工藤 1995, 庵 2012)

テ ン ス		アスペクト	
		完成相 (perfective)	未完成相 (imperfective)
	非過去	ル形 (- $\varphi^{(7)}$ -(r)u)	テイル形 (-tei-ru)
	過去	タ形 (- φ -ta)	テイタ形 (-tei-ta)

4.2 第二言語習得研究からの問題提起——崔（2009）ほか——

表1ではテイル形／テイタ形は「テイ+ル／タ」ととらえられるだけだが、日本語学習者にとっては、テイル形／テイタ形の用法（進行中／結果残存）およびテンスの違いによって難易度が異なることが第二言語習得研究において指摘されてきた。

その代表的な研究である崔（2009）では、次の段階性が指摘されている（a→cの順に難易度が高まる）。

- (5) a. 進行中・現在

- b. 進行中・過去, 結果残存・現在
- c. 結果残存・過去

これに対し, 稲垣 (2015) は崔 (2009) のデータ解釈の問題点を指摘し, 冉 (2017) は文法性判断テストとフォローアップインタビューを組み合わせることによって, (5) が (6) である可能性を示唆している。(難易度は (5) と同様)

- (6) a. 進行中・現在
- b. 進行中・過去
- c. 結果残存・現在
- d. 結果残存・過去

4.3 日本語のテンス・アスペクト体系 (修正拡張版) —— 庵 (2014), Iori (2014) ——

以上を踏まえ, 庵 (2014), Iori (2014) では表1を修正・拡張した (これらの用法を学習者向けにまとめたものに庵・清水 2016がある) が, ここではこれについて述べる。

4.3.1 基本用法

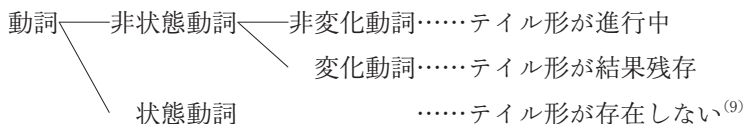
まず, 基本用法 (進行中, 結果残存) については表2のようになる。

表2 日本語のテンス・アスペクト体系 (2) (基本用法)

		アスペクト				
		完成相 (perfective)	未完成相 (imperfective)			- ル/タ
			対立なし	進行中	結果残存	
		非状態動詞	状態動詞	非変化動詞	変化動詞 移動動詞	
テ ン ス	未来	ル形	ル形	テイル形	テイル形	観察時 ⁽⁸⁾
	現在	×	ル形	テイル形	テイル形	
	過去	タ形	タ形	テイタ形	テイタ形	

表2に関して重要な点は以下のようなものである。

1. 動詞はアスペクトの観点からは次のように分類される (奥田 1977 に基づく)。



2. 変化動詞か非変化動詞かは次のテストフレームでチェックする (Vendler

1967)⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾。

「期間を表す語 + φ 」が可, 「期間を表す語 + で」が不可 → 非変化動詞

「期間を表す語 + φ 」が不可, 「期間を表す語 + で」が可 → 変化動詞

(7) 太郎は {1時間 φ / #1時間で} 走った。 → 「走る」は非変化動詞

(8) 氷は {*10分 φ / 10分で} 溶けた。 → 「溶ける」は変化動詞⁽¹²⁾

3. 日本語では, 移動動詞のテイル形は移動先にいること(結果残存)を示し, 移動中(進行中)を表せない。これは学習者にとって難しい点であり, 注意が必要である。

(9) 太郎は大阪に行っている。(太郎は大阪に行った + 大阪にいる)

(10) *太郎は今, 大阪に行っている。今ごろは新幹線の中だと思う。

(11) ok 太郎は今, 大阪に向かっている。今ごろは新幹線の中だと思う。

4. 3. 2 派生用法⁽¹³⁾

派生用法には, 繰り返し, パーフェクト, 完了, 反事実, 形容詞的用法がある。繰り返しはル形でも表せるが, テイル形の方が一時性が出る。

(12) 太郎は {このごろ / 一月前から / φ } 朝6時に起きている。

(13) 太郎は {?このごろ / ??一月前から / φ } 朝6時に起きる。

工藤(1995)は本稿で言う「パーフェクト」と「完了」を合わせて「パーフェクト」と呼んでいるが, これは誤りであると考えられる(庵2001, Iori2014)。

パーフェクトは, 過去の出来事の影響が現在まで残っていることを表すもので, 次のようなものがある。

(14) 夏目漱石は1867年に生まれている。

(ok 生まれた, *生まれたことがある)⁽¹⁴⁾

(15) 彼は高校時代カナダで暮らしている。だから, 英語がうまい。

(ok 暮らした, ok 暮らしたことがある)

(16) 犯人は3日前にその店で食事をしています。(*食事をしました)⁽¹⁵⁾

完了は, 基準時で表される時間以前に出来事が起こったことを表すものである⁽¹⁶⁾。

(17) 会場に着いたとき, コンサートは始まっているだろう。(未来完了)

(18) コンサートは今, 始まった。(現在完了)⁽¹⁷⁾

(19) 会場に着いたとき, コンサートは始まっていた。(過去完了)

反事実は, 過去のテイタ形で使われることが多いが, 現在のテイル形も可能であ

る。いずれの場合も、日本語ではこの用法を解釈されるためにはバ／タラ節が必須である⁽¹⁸⁾。

(20) 今お金があったら、あのカメラを買っている。 (反事実現在)

I would buy that camera if I had enough money.

(21) あのときお金があったら、あのカメラを買っていた。(反事実過去)⁽¹⁹⁾

I would have bought that camera if I had had enough money.

形容詞的用法の場合、連体修飾位置ではタ形になるのが一般的である。

(22) メアリーは {青い目をしている／*青い目をした}。

(23) {(?) 青い目をしている／青い目をした} メアリー

以上をまとめると、表3のようになる (×はその用法がほとんど使われないことを表す)。

表2, 表3からわかるように、日本語は、「 ϕ , -てい-, -る, -た」という形態素、従属節 (バ節／タラ節) の有無と「-る, -た」の機能 (観察時／基準時) を組み合わせて、テンス・アスペクト体系を表しているのである。

表3 日本語のテンス・アスペクト体系 (3) (派生用法)

	繰り返し	パーフェクト	完了	反事実	形容詞的	-ル/タ
未来	×	×	ているだろう	×	(ている)	基準時 ⁽⁷⁾
現在	ている	ている	た	ている	ている	
過去	ていた	×	ていた	ていた	ていた	

*反事実の場合、従属節 (バ節／タラ節) が必須

*「-ル/タ」は、パーフェクト、完了、反事実では「基準時」として機能する

ここで、テンス的な部分を取り上げると、日本語は次の6時制であると考えられる。「現在」の「る」は状態動詞の場合で、「×」は非状態動詞の場合である。

表4 日本語のテンス

過去完了	過去	現在完了	現在	未来完了	未来
ていた	た	た	る/×	ている (だろう)	る

また、これ以外に、継続⁽²⁰⁾を表す形式もある。

表5 継続を表す形式

-ル/タ	観察時	基準時	
	観察時における継続	基準時までの継続	基準時からの継続

未来	続け(てい)るだろう	×	×
現在	続けている	てきた／てきている ⁽²¹⁾	ていく(だろう)
過去	続けた／続けていた ⁽²²⁾	てきていた ⁽²⁰⁾	ていった

ここで、テクル形では、基準時が現在の場合、普通「てきた」が使われる⁽²³⁾。

- (24) a. 雨は2時間降り続けた。
 b. 私が会社を出るときも雨は降り続けていた⁽²⁴⁾。(波線部は観察時)
- (25) 最近、近所でもちゃんとつないで散歩している犬も徐々に増えてきた(*増えてくる)し、純血種も明らかに増えてきている。(BCCWJ プログ. OY14_15193)
- (26) 協議会の発足当初、すでにあちこちにあった直売所ではしだいに売り上げが増えてきていた。(BCCWJ『日本の宝＝水田を生かして新しい産地づくり』PB56_00058) (波線部は基準時)

5. 他言語との比較の型として——英語との対照の試み——

本節では、表2～表5の日本語の体系を比較の「型」とし、それと英語の体系の比較を試みる(英語の言語事実については、柏野1999を参考にした)。

表6 英語のテンス・アスペクト体系(1)

	完成相(perfective)		未完成相(imperfective)	
			進行中	結果残存
	非状態動詞	状態動詞	非変化動詞 移動動詞	変化動詞
未来	will+原形	will+原形	will be+現分	will be+過分
現在	×	現在形	is+現分 ⁽²⁵⁾	is+過分
過去	過去形	過去形	was+現分	was+過分

表7 英語のテンス・アスペクト体系(2)

	繰り返し	パーフェクト	完了	反事実
未来	×	×	will have+過分	×
現在	現在形	have+過分	have+過分	would ⁽²⁶⁾ +原形
過去	used to+原形	×	had+過分	would have+過分

表8 英語のテンス

過去完了	過去	現在完了	現在	未来完了	未来
had + 過分	過去形	have + 過分	現在形 / ×	(will have + 過分)	will + 原形

表9 英語の継続を表す形式

-ル / タ	観察時までの継続
未来	(will have been + 現分)
現在	have been + 現分
過去	had been + 現分

このように、日本語と英語のテンス・アスペクト体系は多くの部分において、形態素レベルで対応している。ただし、結果残存におけるズレは大きいので、注意が必要である⁽²⁷⁾。

6. おわりに

本稿では、「母語の知識を活かした日本語教育」のための基礎的な研究として、日本語のテンス・アスペクト体系を記述し、それと英語の体系の比較を試みた。それぞれの基本用法の体系を並べてみると次のようになる。

表2 日本語のテンス・アスペクト体系 (2) (基本用法)

	完成相	未完成相			-ル / タ
		対立なし	進行中	結果残存	
	非状態動詞	状態動詞	非変化動詞	変化動詞 移動動詞	
未来	ル形	ル形	テイル形	テイル形	観察時
現在	×	ル形	テイル形	テイル形	
過去	タ形	タ形	テイタ形	テイタ形	

表6 英語のテンス・アスペクト体系 (1)

	完成相	未完成相		
			進行中	結果残存
	非状態動詞	状態動詞	非変化動詞 移動動詞	変化動詞

未来	will + 原形	will + 原形	will be + 現分	will be + 過分
現在	×	現在形	is + 現分	is + 過分
過去	過去形	過去形	was + 現分	was + 過分

表2と表6からもわかるように、日本語と英語のテンス・アスペクト体系は多くの部分で、形態素レベルで1対1対応する⁽²⁸⁾。これは、英語話者やそれに近い英語力を持つ学習者にとって日本語のテンス・アスペクト体系は理解しやすいものであることを示している。このことを利用せずに日本語の体系のみを教えても十分な理解は得られず、結果として、テンス・アスペクトは上級でも誤用が残る部分となっている（高梨 2013 ほか参照）。

今後は、本稿で示した日英の体系の対応関係をより精査するとともに、英語と同様の体系を持つ言語との（parametric な）ズレを考察していく必要がある。

その一方で、今回示したような対応関係を日本語と中国語との間で示すことができれば、中国語と同様の体系を持つ東南アジアの言語の話者に対するテンス・アスペクト教育が大きく前進することが期待できる。例えば、中国語では、進行中過去を（日本語や英語のように）組み立て的に表すことはできないと思われるが⁽²⁹⁾、これは中国語においてテンスが文法カテゴリーではないことの帰結の1つであると考えられる。

さらに、同様の比較を今後、格枠組み、ボイス、モダリティ、複文などについても行うことで、日本語教育文法の内包を豊かにしていくことが可能になると考えられる⁽³⁰⁾。

謝辞

本稿は、科研費 16K02804（研究代表者：太田陽子）、および、科研費 17H02350（研究代表者：庵功雄）の研究成果の一部である。

注

1. 日本語教育文法についての論者の最新の考え方については庵（2017）を、日本語教育文法誕生の歴史的背景については庵（2011a, 2013）を、それぞれ参照されたい。
2. 具体的には、対照研究、誤用観察、習得研究が一体となった「三位一体の習得研究」の必要性が説かれている。この理念は、張麟声氏が設立した「中国語話者のための日本語教育研究会」の理念でもある（庵ほか編 2017 も参照）。

3. このことの理由は例えば次のようなものである (cf. 庵 2015a, 2016a)。(1) a について言えば、規則の数が増えると、学習者がオンラインで使いこなすことが難しくなったり、規則相互の間で矛盾が起こる可能性が増えたりするということがある。一方、(1) b について言えば、抽象化は理解にとっては有効であるが、産出にとっては必ずしも有効ではない。その具体例として、「から」と「ので」の違いに「主観的」「客観的」という概念を用いることの問題が挙げられる (永野 1952, 趙 1988, 岩崎 1995)。
4. 張麟声氏が「母語転移」を重視するのもこの理由によるものであると論者は理解している (母語転移について詳しくは, Odlin (1989), 奥野 (2005) を参照)。
5. 同様に「意味から形式への写像の仕方の言語差」を考える上で重要な研究に、動詞が表す結果性について論じた宮島 (1985) がある。
6. 実際、日本語で理由だけで話を終われるのは理由が重要であるからであり、(a)~(c)からわかるように、結論だけを述べて話を終えるのは (中国語だけでなく) 日本語でも不自然である ((a)~(c)は井上 (2015: 8-9) より)。
 - (a) A: 明日映画を見に行かない? / B: ごめん。明日は授業なんだ。[理由]
A: (残念そうに) そうか。わかった。また今度ね。
 - (b) A: 明日映画を見に行かない? / B: ごめん。明日は行けない。[結論]
A: (残念そうに) ?? そうか。わかった。また今度ね。
 - (c) A: 明日映画を見に行くんだけど、行かない? / B: ごめん。明日は行けない。[結論]
A: え、どうして?
B: 明日は授業なんだ。[理由]
A: (残念そうに) そうか。わかった。また今度ね。
7. φ はそこに有形の要素がないことを表す。
8. テイル/テイタのル/タが観察時を表す基準時を表すかについて詳しくは、庵 (2014), Iori (2014) を参照。
9. 奥田 (1977) は、金田一 (1950) の「状態動詞」と「第4種の動詞」をまとめて「状態動詞」としている。また、「似る」のように形式上ル形とテイル形の区別があってもそれがアスペクト的に対立しない場合は、それを「偽アスペクト」と呼び、「状態動詞」に含めている。
10. 「期間を表す語 + φ 」は「for~」, 「期間を表す語 + で」は「in~」にそれぞれ相当する。
11. このテストフレームは厳密には限界動詞と非限界動詞を区別するものである。限界動詞 ([+bound]) には、変化動詞 (Vendler (1967) の Achievement に相当) と、(d) のように量的に限界点が設定される場合 (同 Accomplishment に相当) がある。
 - (d) 太郎は 10 km を { *1 時間 φ / 1 時間で } 走った。
 非限界動詞 ([-bound]) には、非変化動詞 (Vendler (1967) の Activity に相当) と、状態動詞 (同 State に相当) が含まれる。
12. 「溶ける」のような不可逆的变化の場合は「期間を表す語 + φ 」は言えないが、「閉まる」のような可逆的变化の場合は「期間を表す語 + φ 」も言える。したがって、「変化動詞」か否かについてより重要なのは、「期間を表す語 + で」が成り立つことである。
13. これらが派生用法と呼ばれるのは、基本用法では進行中と結果残存のいずれに解釈され

るか動詞の意味によって決まるのに対し、派生用法では動詞の意味の違いは無関係になるためである。

14. この用法のテイル形とタ形の関係については井上(2001)を参照。
15. 「犯人」を直接見ていない刑事は(16)のようになかなか言えないのに対し、「犯人」を目撃した店員は次のようにテイタ形と言うのが普通である(進行中過去)。
(e) この人は3日前この店で食事をしていました。(? 食事をしています)
16. ここで言う「完了」は、寺村(1984)の「完了」(cf. 庵2012)とは異なり、時制的な性質のものである。寺村(1984)の「完了」を「過去」のバリエーションと見る見方については、井上(2001, 2011)などを参照。なお、本稿で言う「完了」ではテイル形、テイタ形はどちらも使われるのに対し、本稿で言う「パーフェクト」はほぼテイル形に限られる。
17. タ形の一部に現在完了の用法を認めることについては庵(2001, 2015c)を参照。
18. 一方、英語では従属節がなくても仮定法であることを表せる。
(20) 'I would buy that camera.
(21) 'I would have bought that camera.
これは英語には法助動詞(modal auxiliary verb)があるのに対し、現代日本語にはそれがないためである(なお、古典語の「む、らむ、けむ」などは法助動詞であったと考えられる。尾上2004などを参照)。
19. (20)(21)はそれぞれ英語の仮定法過去、仮定法過去完了に相当する。
20. ここで言う「継続」は、出来事の局面という意味でのアスペクトにおけるもの(寺村1984の「三次アスペクト」、Actionsartに相当するもの)であり、「開始」「終結」と対立するものである(cf. 森山1984, 1988, 仁田2009)。したがって、二次アスペクトである「-てい-」とは統合的(syntagmatic)関係にあるので、「-続ける」と「-てい-」は共起可能である。
21. 過去の「てきていた」の「-ていた」は「過去完了」を表している。
22. 「-続ける/-続けた」と「-続けている/-続けていた」の違いは、完成相と未完成相の違いに相当し、「-続けていた」の「-る/-た」と「-てきていた」の「-る/-た」の機能は異なる。つまり、「-続けている/-続けていた」の「-る/-た」は観察時を表すのに対し、「-てきていた」の「-る/-た」は基準時を表す。
23. これに対し、テイク形の場合は、基準時が現在のとき「-る」が使われる。
(f) パッケージソフトはより安価でコンパクトになり、放送などのソフトの供給サービスチャンネル数はどんどん増えていく。(BCCWJ『激動の平成ビデオ史』LBh6_00015)
24. (24) a と (24) b の違いは (g) a と (g) b の違い、すなわち、知識として述べる ((g) a) かその現場を回想して (= 記憶の中でそこに行き) 述べる ((g) b) かの違いに対応する (cf. 庵2018)。
(g) a 昨日の夜、雨が降った。(完成相過去)
(g) b 昨日の夜8時ごろ、雨が降っていた。(未完成相・進行中過去)
25. 表中の「is」はBe動詞現在形、「was」はBe動詞過去形の代表形であり、「現分」「過分」はそれぞれ「現在分詞」「過去分詞」の略称である。

26. “would” は “should” など他の法助動詞の代表形とする。
27. この点、ブラジル・ポルトガル語 (BP) は英語よりさらに日本語の体系に近い (トッフォリ 2017)。日本語のヨル・トル方言 (徳島方言) と韓国語を比較した高 (2017) も参照。
28. ただし、移動動詞には注意が必要である (4.3.1 節参照)。
29. 例えば、次の中国語の文で「了」「的」を使うことはできない。
 - (h) a さっき会社を出るとき、雨が降っていた。
 - b It was raining when I left my office.
 - c 我刚才出公司的时候，正下着雨 (*了/*的)。
30. 例えば、日本語と英語の格枠組みの対応関係を調べた庵 (2016b) を参照されたい。

参考文献

- 庵功雄 (2001) 「テイル形, テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」『一橋大学留学生センター紀要』4, 一橋大学
- 庵功雄 (2007) 『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版
- 庵功雄 (2011a) 「日本語記述文法と日本語教育文法」森篤嗣・庵功雄編『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房
- 庵功雄 (2011b) 「100% を目指さない文法の重要性」森篤嗣・庵功雄編『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房
- 庵功雄 (2012) 『新しい日本語学入門 (第2版)』くろしお出版
- 庵功雄 (2013) 『日本語教育, 日本語学の「次の一手」』くろしお出版
- 庵功雄 (2014) 「テイル形, テイタ形の意味・用法の形態・統語論的記述の試み」『日本語文法学会第15回大会発表予稿集』
- 庵功雄 (2015a) 「「産出のための文法」に関する一考察——「100% を目指さない文法」再考——」阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三編『文法・談話研究と日本語教育の接点』くろしお出版
- 庵功雄 (2015b) 「中国語話者の母語の知識は日本語学習にどの程度役立つか——「的」を例に」『汉日语言对比研究论丛』7, 汉日语言对比研究会
- 庵功雄 (2015c) 「現代日本語におけるテンス・アスペクト体系についての一考察」第141回関東日本語談話会発表要旨
- 庵功雄 (2016a) 「「産出のための文法」から見た「は」と「が」」庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己編『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版
- 庵功雄 (2016b) 「「母語の知識を活かした日本語教育」に関する一考察——格枠組み (Case frame) における日英対照を例に——」『一橋日本語教育研究』4, ココ出版
- 庵功雄 (2016c) 『やさしい日本語——多文化共生社会へ』岩波書店
- 庵功雄 (2017) 『一歩進んだ日本語文法の教え方1』くろしお出版
- 庵功雄 (2018) 「新しい留学生向け総合教科書作成のための予備的考察: 初級文法項目を中心に」『言語文化』54, 一橋大学

- 庵功雄 (2018) 『一步進んだ日本語文法の教え方2』くろしお出版
- 庵功雄 (2019 近刊) 『日本語指示表現の文脈指示用法の研究』ひつじ書房
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2000) 『初級を教えるための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2001) 『中上級を教えるための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 庵功雄・清水佳子 (2016) 『上級日本語文法演習 時間を表す表現 (改訂版)』スリーエーネットワーク
- 庵功雄・杉村泰・建石始・中俣尚己・劉志偉編 (2017) 『中国語話者のための日本語教育文法を求めて』日中言語文化出版社
- 稲垣俊史 (2015) 「中国語話者による日本語のテンス・アスペクトの習得——崔 (2009) の再解釈」『中国語話者のための日本語教育研究』6, 日中言語文化出版社
- 井上優 (2001) 「現代日本語の「た」」つくば言語フォーラム編『「た」の言語学』ひつじ書房
- 井上優 (2011) 「動的述語のシタの二義性について」『国立国語研究所論集』1, 国立国語研究所
- 井上優 (2013) 『そうだったんだ! 日本語 相席で黙ってられるか』岩波書店
- 井上優 (2015) 「対照研究について考えておくべきこと」『一橋日本語教育研究』5, ココ出版
- 岩崎卓 (1995) 「ノデとカラ」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (下)』くろしお出版
- 奥田靖雄 (1977) 「アスペクトの研究をめぐって——金田一的段階——」奥田靖雄 (1985) 『言語の研究』むぎ書房に再録
- 奥野由紀子 (2005) 『第二言語習得過程における言語転移の研究』風間書房
- 尾上圭介 (2004) 「第1章 主語と述語をめぐる文法」尾上圭介編『朝倉日本語講座6 文法II』朝倉書店
- 柏野健次 (1999) 『開拓社叢書9 テンスとアスペクトの語法』開拓社
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」金田一春彦編 (1977) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房に再録
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- グループジャマシイ (1998) 『日本語文型辞典』くろしお出版
- 高恩淑 (2017) 「日本語と韓国語のアスペクト体系に関する一考察」『日本語文法』17-2
- 小林ミナ (2013) 「日本語教育文法の研究動向」『日本語学』32-7
- 崔亜珍 (2009) 「SRE 理論から見た日本語テンス・アスペクトの習得研究」『日本語教育』142
- 冉露芸 (2017) 「テイル形の使用における中国語話者の意識」『中国語話者のための日本語教育研究』8, 日中言語文化出版社
- 高梨信乃 (2013) 「大学・大学院留学生の文章表現における文法の問題——動詞のテイル形

- を例に」『神戸大学留学生センター紀要』19, 神戸大学
- 趙順文 (1988) 「「から」と「ので」」『日本語学』7-7
- 張麟声 (2011) 『新版 中国語話者のための日本語教育研究入門』日中言語文化出版社
- 張麟声 (2017) 「学習者の母語を中国語に特化した日本語教育文法を考える際の基本文献」
中国語話者のための日本語教育研究会特別講演会資料
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- トッフオリ・ジュリア (2017) 「ブラジル・ポルトガル語を母語とする日本語学習者の結果
残存のテイルの使用傾向に関する一考察」2016年度一橋大学言語社会研究科修士論文
- 永野賢 (1952) 「「から」と「ので」はどう違うか」『国語と国文学』29-5
- 仁田義雄 (2009) 「第12章 日本語のアクチオンスアルト」『仁田義雄日本語文法著作選第
1巻 日本語の文法カテゴリをめぐって』ひつじ書房
- 彭飛 (2006) 『日本人と中国人とのコミュニケーション——「ちょっと」はちょっと……
——』和泉書院
- 三原健一 (1997) 「動詞のアスペクト構造」鷲尾龍一・三原健一『日英語比較選書7 ヴォ
イスとアスペクト』研究社出版
- 宮島達夫 (1983) 「日本語とヨーロッパ語の移動動詞」宮島達夫 (1994) 『語彙論研究』むぎ
書房に再録
- 宮島達夫 (1985) 「ドアをあけたが、あかなかった」宮島達夫 (1994) 『語彙論研究』むぎ書
房に再録
- 森山卓郎 (1984) 「アスペクトの意味の決まり方」『日本語学』3-12
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar* (2nd Edition). Routledge.
- Halliday, M. A. K. & R. Hasan (1976) *Cohesion in English*. Longman.
- Iori, I. (2014) "Notes on the Subjunctive Mood in Modern Japanese", *Hitotsubashi Journal
of Arts and Sciences*. 55-1, 一橋大学
- Odlin, T. (1989) *Language Transfer*. Cambridge University Press.
- Vendler, Z. (1967) *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.